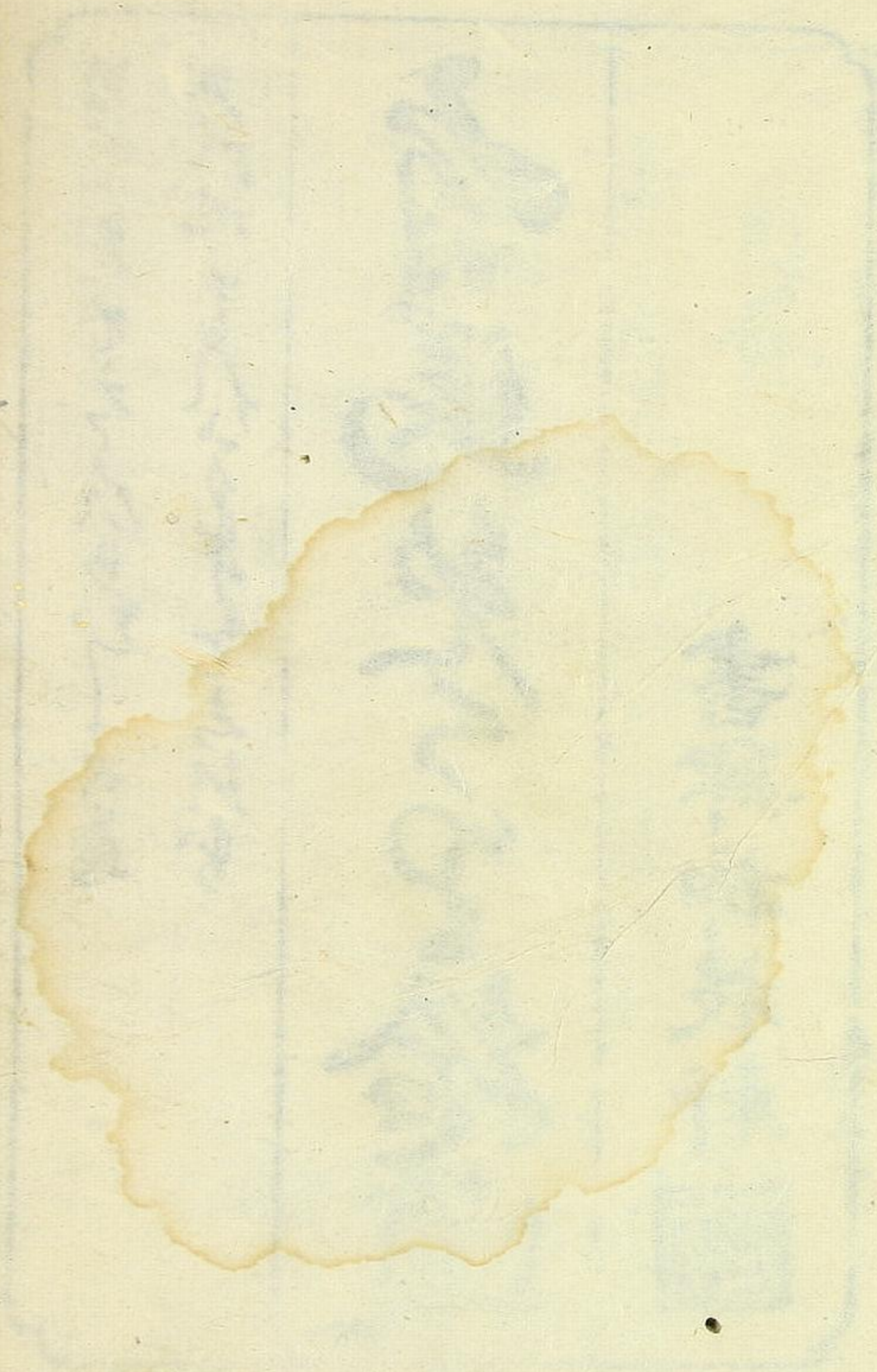


内馬湯心道記繪巻

イ13
509



113
509



1 13
509



貞東先生之ひあむり有馬
乃の記よもれり半を志す

有馬先生と拾遺

書肆柳枝軒 

有馬山温泉記追記

目録

- 一 系有馬湯心道追記 二十
- 一 湯山の事記追記 五十
- 一 八湯の法追記 七十
- 一 湯治れ身物の事 八十
- 一 湯治の酒心持れ 九十

大正十五年二月
花房仙太郎氏寄贈

〇五二五二五

一湯山の青社追加

十三丁

一有馬の心川名所古跡追加

十四丁

一有馬の長庫通の道

十五丁

一有馬の那路と三木通の道付

十七丁

有馬の清久の早道

十七丁

一有馬の三木と河丹生心田畝の道

十七丁

一那路を捨別く境を陸路

十七丁

有馬山温泉記追加

系記より有馬との道乃事ハ

具原蓋軒ハ記ニあり而も一

唯濃川より西池田乃道ニあり

親勝とらるの事と少はより書らる

る事也

濃川 高 是より小湊へ二里あり小湊を

垂よりの海道を池田へ引ハ濃川北宿

西のけつまふり右の方よ池田道の
 われありけも橋塚本れ部尾ア
 かと云雨皆橋本とう新雨之世よ更
 方紅白段の牡丹は尾部の市多氣
 と云者れ園より出山中と云白牡丹ハ
 本への枝葉つと云者れ園より出と云
 光遍寺一向多
 池田と云て多田へ引れ道のた久安寺

へ安の右の山もへ出る及よ二十町
 久安寺 行基の園基之むきは親
 初の大澤山安寺のちと云條延年申
 焼失の後近衛院久安元年を記
 建立するて宿巻の額よ久安寺と記
 一跡寺に宝物多し藤の川と違
 川と云行基の水と釣り結びてさり

比叡は流し火はけねありしを率
 て多田院の四方に波神の新乾るに
 ケ而有し定乾より久安寺築は儀
 光寺良は頼光寺坤は安養寺
舊名とハと云傳ふ
 小量寺 波神の息是丈丸の命に
 一幸ありと害せしと云
 儀乾寺 神考山と号揚道法師の園基

其言室之奥乃院あり門前は是丈
 丸伸光幸あり三人の墓あり初は小
 量寺は有しと云
 波神乾の跡 在れ言山の下にあり
 最明寺は遊 山づつひは申ふは此の
 道よりあり最明寺の対乾遊親は而し
 云対乾の乾は跡とてありと云遊は役の
 行者は是跡と云而あり

湯院寺 蓬萊心と号小湊と生瀬

のる穴中やう多々自らの所記
僧徒の因基志言家之常記に依り
意録と云浴湯者田口の意録と
家より迂り故に湯し意録と云
とそ有馬よ云然る者蒸ん坊もいふに
依れりとかり

湯院寺登軒の記よ書

凡此の温泉天下に比せられざる者
湯ありありありの温泉病よりありて
效ありとていどもあるは甚あつて
入湯する人多くは堪へず又冷湯
て厳寒より入浴しが元もわり唯
あるの湯れと冷熱人の好よ悪
がことむ事暑る者多しとてはたひ
先ありとてと色相ありきくはあり

おぼゆるとつとめて入時ハ湯わよしと
あそくつるふおよぶあおのつう中と
ゆらぐこころ又とじわらぬ時を湯中よ
堪れハ温氣度より昇て後中わす
ゆり澄ぼよ汗紙僅す才一よ氣あ
くく食ととめて奇妙の温湯之有
馬よ予が相あれる老醫れわりて終り
くハ元は湯ハ徳病にあらく唯死病の

一症乃こころしからぬあわて澄ぼ
時を氣血の不順温湯の巡環は疾
ら故よ死病甚近く切ると云故に脾
胃虚勞咳膈噎老衰ホの病は害
ある事じへこ

有馬湯の山蓋軒の記よ妙り
夏と記と

元湯ハ乃あそく宿じり家二十坊と云ハ

湯女の付る方宿の名は山道と坊の
名も此もあり若狭を体取の敷又三
十坊より和孫と坊の名あるは二階
坊横坊の敷之姓古仁世上人者神より
傳ひ給ふ十二家と云ふ沈の坊茅の
坊の敷い跡りておまどと西れ坊水の坊
れど此の絶つるがなは十二坊の名今いた
くふ知らんや

二の湯二十坊小湯女名は右某不意
ふして人のかれと名を替へす唯下大
坊の敷い跡りておまどと西れ坊水の坊
れど此の絶つるがなは十二坊の名今いた
くふ知らんや

熱く有馬の真の温泉小澄と云
書に委放書之

入湯の法 凡し湯に入人湯入のる方を
はしむ事甚どしたる所り故は病を生

しと却て名湯をそくけの類多し
湯わがりの温湯の氣身は徹して
室とおぼへど故は浴衣ひととて
久しく唯し風は感うゆ事と
又入湯の酒食をわらう事なほ
害ありとて飲食をさうこた
を和誦淫声のきつれ方にむして
進み安らゆへよきばく礼に及ぶ中

めを色慾はとて湯浴よりむれ
べ性者よりけ地よかてくま
女妓童のあがくもさゆ事とゆ
さすゆして湯女の酒宴の席よぞ
じとくと母客は通る事いふ
しめかれのありよういかに
あり壯男のふるよとくに
病とゆは程とぬねとてけ地よ

人温泉と疎あうそくよかりなが放よ一日何と
びふふてびおる幕まくのわあありて
を飲食とらよくせんあつと飲してうめが
いどあるしいかんしやうれん盤上連歌の席せきの盈みちど
かど備あしと鞠揚まりやうられ場ばらるるばなる
以いさふが放よ朝あさとらづして書生しやうせいの
書しやうと失ふの浅あしまうし紀事きじあり元湯もとゆ治ちよ
あり人の四民しよんたよあしむし時日ときひとつ

やこのまうは仕官しくわんたろ身みの暇ひまあらし君くん
急いそこ乃勅しやくとうたては比ひよ暮くれりあがら
書生しやうせいとあろそらひとくうら唯温泉ただおんせん
と恙しやうのどとく神かみのどとく難がたひはよみ
是こゝに仕つかへてい温泉おんせんのふよ叶かひて病やまと
除のぞくの穢あぢとあふる湯ゆへの名ならん體てい
と不潔ふけついしと温泉おんせん乃のふよ宵よひへう
らび

温泉の記

二

入湯のうち出風と想へ〜
へうの程も色を洗くし〜
て枕のうらされも浴後の氣あがり
神ゆらむゆへは落致し〜
みろ殿とぞ懼し却て風と感
宴し〜
時を暮し〜
づこして〜

よあけの奴婢よはらり期と定てよび
さまよふ〜
夫氣和暖の目へ近とわたり敷
遊路法も〜
中と後歩と〜
に今日の湯の由り〜
刻限と考てゆ〜
朝夕の食を〜

とぞいづれも入湯のなるまゝくを扱あす
ぬやういづれも一他はう人さ交りてハ
かゝうの事とんれまゝあらと宴會
よ味と答せんとして心と盡とれ害
わり交るる方よはあす

若取中り深あり目ある文字は
うた人の假名の抄物とよみ右と吟
一香と糖酒と微碎よのそ奴婢也

あつて樂へ一法の商人つとて
さみ故よとひりて事あり
心屋の朋友有る産竹と筆やれ物
と求んまるとのそ、吾下はとらあひさ
くうものがひて暮りあうかまのものを
とゆとれくし七日くのたのむけ
まのゆかりと近くなりて五人よははる敷
雲の玉露味よとて破々にやとく

よはまらく木の熱あり有馬ふつこ
たろ野の目子工人を呼してしどく
く人これ好と洗さう坊様乾とわえ
て云得させぬ道へ目教と換ゆは本
とる道漆と干ま製秘んらろめ
て氣とやとらうと又えらり欄と有
れ奥の遊さふ害あり只栄眼の目資
後と見合て秋よ夜せし人のらよ叶ふ

ござくにかひへ

奴婢もたふ湯よらん事としどく
りゆへ電のやとりとこくに成て火
と焦つともかやと解り安しみつら
心とまへて朝夕は乾くとちるへ
湯乃心一寺三院と云傳方へ温泉と
菩提院薬着院能薬院へ中に菩
提院へ申はより絶てありと海と今

善提町と云 船泊の所あり 施業流ハ
 曹洞宗也 今ハ善福寺の末寺也
 毎秋一の湯内外の地味といふ寺あり
 掘りて棠あり 院ハ今ハ阿弥陀坊之先也
 曹洞宗也 善福寺の末寺といふ此
 飯山泉あり 千野利休築しと云々
 製巧あり 匠といふとも 相ありて 今めり
 一ハ利休依りて 二ハ別と云々

さて 善福の形 一ハあり 世ハ阿弥
 陀堂舎と云ハ 此寺の住僧ハ 頭ハ形
 ともあり 一ハあり 又ハ寺に有ハ 水神
 河模範といふと云々 佛あり
 報恩寺 高言富といふ寺ハ 中ノ聖
 徳太子不動帝釋天あり 故ハ聖
 俗度申堂と名付て 糸指の人多
 一毎秋二の湯内外ハ 地味といふ寺

よりかづえ

極楽寺

浄土宗兼阿曇丸うしろなり

あき湯の舟のやうに湯舟に入らぬの
妨とせんをふむれをきふし杖を降
ふる所 湯の舟のやうに あき湯舟し即
湯をさす ころとふその徳の心盛は
ちりぬし課法をさす 湯舟をさすこれと
とあり

少て冥途への川の果生並に轉女松仏

絶あり

横戸堂親善堂の兼阿曇丸の境内なる并に

慈心坊の舟子兼仁の石塔とて堂乃

腹よりわりの兼仁の半時俗の云なりが小

て徳ありはとそ

金剛寺

日蓮宗

林溪寺

一向宗兼阿曇丸の東寺

らりかづえ

極樂寺

浄土宗薬師堂なりしなり

会仏寺

浄土宗同極

清涼池

行基の用基ありて慈心坊也

慧と仲奥の祖といひ今ハ禅宗黄蘗義

末寺之清盛の石塔慈心坊の石塔并

又大園の如ひ此湯の跡は寺に在り

わり熱くして古來よりく裡れあり寺

少て冥途への川の果生並に轉女如仏

絶あり

横丁堂親善堂の業師の境内より并に

慈心坊の才子慈心坊の石塔とて堂乃

取よりあり慈心の半時俗の云あり小

て控ありはとそ

金剛寺

日蓮宗之

林溪寺

一向宗本堂なりし末寺之

臨法寺 系口外又町坪より西の麓乃
末吉之

天祚 蒙為院乃振より

有馬丸山

建雲山 湯雨より西に

泉坂 本教寺の末吉に生身の跡臨云

切地山

塞山

高塚 湯雨より南の山中

白石 鞍渡の上七八町

佛舟 鞍渡より二十余町矣

籠立岩 高橋より三町水

羽来山 名前の湯雨より三里坪也

湯山 大坂へゆり接戸巡りより

有馬丸山

見物どろの道筋をたよわらす

湯山より西へ海道へ出るの道二筋あり

一の有馬より唐櫃みの管谷經て芸

摩へ出り約七里へ坂路狭く馬よ

乘ての通りかへた所をいひ道中へ有

馬の方より出り半よき處に人をも

けて通と申わり右實之とを丹生

丸山田隆栗谷勢尾へ去りい道近

くて役より一巻序通と云て東へ向るよ
い道近これとを攝子と名る申ありと
故よ今一筋の三本通へ由りて取
見物どろと云うと云

○湯山より姫路までの道を記すと

湯山より姫路へ出り乃踏淡河三本の

平海道を記すと

五社 湯山より半里へ今の有馬氏乃

（有馬氏乃）

（五社）

先祖せんぞ安少やすちゆう誕生たんとくありしと云傳いひつたる右の方みぎのほう
宮山みややま八幡はちまん少すくてそ氏うぢ神かみ切きる由よし

堰越村いりこしむら

柳谷村やなぎやむら

いふは監輿かんごあり旅人りょじんの宿しゆくなり

つと拍村つとひやくむら

右に三田さんでんへ道みちあり丸まるの道場みちば村むら

急いそ流ながちとて昔むかしは七堂しちどう伽藍がらんあり義經よね

獲とたんと流ながしたまふ所ところと云い

源谷坂げんやぶさか

傍かたわら接つぎり境さかいに三さんが松まつとて名事なごころ

切きり松まつわり

徳勢村とくせいむら

丸まるの山やまと越これは丹生に乃の苗なえ也なり

淡河あは

馬次うまついで之の有ある馬うまより回まわり天正てんせい寺てら

長照ちやうていち皆みな有ある氏うぢの菩か提たい取とり丸まる

乃の心こころは報かへり怨うらみちへ道みちあり

右みぎ紀きと有ある湯ゆ山やまより淡河あはままで丸まる也なり

海道かいどう之の惣そう進しんとて清きよあまそんそんとて

遷うつりをといふとて丹波たんぱ只ただへまる

乃一是よりと東へ清みへきて淡河へ
出るの道と記す

湯山 是より三田へ三里

中野村

山口村 上下あり 彼と瀧西の右の山と榮白山
と云ふ山は新田郡と云者乃後一城跡と
云令此寺と云親善此山ありたよ牛乳
天王の宮あり令此寺の親善今ハ

は境内あり

櫻井村

早田村

右の方に丹波より大坂への海

道あり追分へ遠く倉百丈なる最

寺の葛蒲あり云皆は右の山あり

桑ヶ部村

道場河原

徳富驛あり町長一様

小井川 小井川 一柳屋本陣あり川と渡り

日ひ間ま榮え屋や 丸まるの小山こやまはたんがれ城しろ址し之の城しろ
 自よ弟にヶ部べ接つ助すけと云いくが終はりし
 云い接つ河が横よ川がへの分われ道みちあり
 横よ山やま村むら 康やす吉きち山やま右みぎよ見みゆり有あ馬まの康やす吉きち
 的てき社しゃの裏うらより勅ちく符ふすす山やま上かみに親おや善ぜんあり
 三さん回かい 九く鬼き丹たん後ご守しゅ屋や 三万六千石の古ふる所ところより
 清きよみ藤ふじまで四よ里り山やまの内うち中なかつ里りあり有あ
 馬ま富とみ士しの三さん回かいの後ごれ山やま

三さん輪りん村むら 的てき社しゃの社しろあり有あ馬ま三さん輪りん的てき
 社しろの裏うらより勅ちく符ふと云いく
 河が防ぼう
 大おほ倉くら
 夷あまヶ部べ
 東あづま野の上かみ
 加か茂の町まちわり
 井い沢ざい

丹波道中

十九

廣野 小舟の丹波道中 右市へ出

法有道へ丸之

新田

下町の波

上河の野 丸の石 別道道わり 流

小橋津丹波乃境わり

立杭 丹波岳山領之麓の石と鏡 而世

よ丹波鏡と云へ家此事

こ津村

むら村 津村の邊に丹波接ふ境小

川わりの邊に横に丹波の接ふの道わり

む村の邊に横に横に親善田ち能田之

法有山 高山の坂内十二町と云へ

里えりりあり津嶽山法ありと云法有

人をして岡山の祀とす天台宗也

十一面親善の祀の礼所也二十

丹波道中

十九

也今にまで子有余年火難の熱なり
ゆへ堂塔瓦礫あして不双の大伽
藍之二層の大塔は多壯乃次また
あり小堂教多し奥院も親名秘伝
之寺に田村將軍の古刀とて二振あり
山内は法ありり務舎六十坊熱して
け山へ接丹波接清三玉の境之境の
路は接丹接丹とあり源平此戦は

三弟山を登りて近し山の上乃林本
甚多しり仲に色松乃大本後し昔
の傍院貧窮ありて本とるり若し
安やうの悪物と遠る事とてせし
近せは一山富饒ありてち傍の事業
と事とて毎坊若し人々を助ひて
善以造る坊板を挽きて賣出とて
至制家素朴ありて形は文ありとて

山内は法ありり

源平此戦は

と色質たるかゝるし堅硬なれ八里長の
りそわのりふふ音ありきそ危てころも
の物も右代所造風あるまほしきと
あや清あのおまぐや八里に及ぶ道
かまの経目よつとめて朝とく出
色山内うち徳沢わらまの清音よ
ころ山よよ富のまへ傍坊よさうま
藤のむらこ村か青川村よ色清乳を

さくじろれ民屋多一
清水より姫路へ出方よ並に法真少
新八順統道八里こは道へ姫路より
丹波越よまへ出方の美道よて道こ
ゆよ真音おの必はたさゆと有る
姫路へ出方よくたこく清あへより法
美へ通れは口里だごりのゆつりこはま
色大谷山とん砂とゆよ清あより漢

河へ出て二本道の道程を記し清あり
里淡河へ六里あり大ぬつと云湯
山より淡河へ車道四里の所清あり
へまかりて十四里余日教一日増へ
淡河 前記二本へ三里へ

下村 丸の山より都仙寺への道あり都仙
寺より丹生寺へ一里と云丹生寺より
後記右より大谷山伽耶院への道あり

山路細く迷ひわたり

志深 宮わりの山より大谷山へ上る
の道あり又右より丹生山田越
の道もまゝへ出る

右回

中村

大谷山大溪寺 法道仙人の用基伽耶
院大僧正山依り先達なる堂へ毘沙

門甚々大麗麗之ニ層の塔わりのそと外堂
敷多し又山内は菴子岩遠葺石
寶鏡山桐壺沙比獄谷ろど云々
わりのそと山と西へわりて中村へ出る
二本 宿驛之廻り社へ二里之町甚々
一里はうらわりの町社後へ別所長治院
一城址今へ田よこしう道た道ざと本
丸二丸の石社これら城山の塔よ揚入寺

相模守

三十三

あり

遠田村 虚空山法雲寺とて別所氏の
菩提取之位牌石階并長治史婦社
絵傳あり
東石井村
西石井村
そとさ村 太よか右川へ出る道あり
廻り糸村 旅人の宿あり姫路へ又里

相模守

三十三

こ舟渡りわりをかた川の上なり

はどめ村

こどがり村 こばしきさるより有れり法

善山のりる道ゆり法善山へ三里半余

法善山 道より有れ山之孝徳天自是年

法道仙人の開基天台宗よてなまき子

子親も唯れつれ而世六歳多り堂敷

多く英藤あして大伽藍之真院開

山雲あり姫路へ三里半道ハ姫路の

町中へ出り書写へありハ唯れ道六里

志方 本道乃馬次之孫客の宿あり

町中小寶校山親善ちと云寺を別

取の家后松橋氏城址なりと云

ふら村

原村 このつと渡りて姫路の町よ入

姫路

山雲あり

三十五

法華山より書写山へ出るよりある
 たへうらび大谷村表日野村小川村(智
 戸)廣野坊(佐乃)藤と通り
 書写山 十八町の坂あり毎町石表とた
 てて平といは性(性)上人の開基(開基)者(者)也(也)
 と号(号)天台宗(天台宗)也(也)なり(なり)如(如)き(き)揚(揚)観(観)を
 明(明)礼(礼)れ(れ)而(而)在(在)七(七)毒(毒)く(く)な(な)堂(堂)の上(上)ふ(ふ)三(三)の
 堂(堂)奥(奥)の院(院)用(用)山(山)堂(堂)も(も)ま(ま)外(外)堂(堂)教(教)多(多)

く美(美)藤(藤)れ(れ)伽(伽)藍(藍)之(之)辨(辨)又(又)が(が)自(自)智(智)せ
 し(し)と云(云)文(文)札(札)料(料)紙(紙)管(管)わ(わ)り(り)堂(堂)下(下)に(に)辨(辨)
 名(名)又(又)が(が)あ(あ)り(り)と云(云)泉(泉)の(の)山(山)上(上)より(より)始(始)り(り)
 中(中)二(二)里(里)也(也)
 後(後)平(平) 藤(藤)中(中)ま(ま)て(て)書(書)写(写)乃(乃)藤(藤)より(より)一(一)里(里)
 わ(わ)り(り)大(大)社(社)之(之)右(右)側(側)大(大)匠(匠)達(達)立(立)之(之)午(午)頭(頭)天
 王(王)也(也)此(此)の(の)祇(祇)園(園)也(也)と云(云)あ(あ)ら(ら)う(う)は(は)れ(れ)
 と云(云)傳(傳)ふ(ふ)白(白)玉(玉)の(の)名(名)窟(窟)和(和)幣(幣)の(の)處(處)也(也)

春の遊

三十一

と云わり
 増後山 臨死と号仁徳天皇此山に
 墓の岡墓中其葉降なり南海を見
 眺しと傳系いんる事弘智此山
 けり少と姫路より廿丁あり昔大江乃
 定基入道寂照の海うみ海りて清涼
 山の池よ目し玉江列石塔の石塔
 此歌なるるふうはる智道と書て鬼

且の海よい道ありたり接玉塔位
 寺にたり道ありと記しあれは
 此の麓中てと海ありたりありや
 姫路 柳原武部を捕殺五の岳地之道
 町二筋長一町中よ伊和之内神法
 わり当玉の一更少て大社あり葉巻
 あり旅人の惣社門よ入事と禁する
 うゆよたわとく徳るこ

春の遊

三十一

○湯山より丹生の山田を越て三本に
分る道と記すと別筋のごとく湯山
越へゆり付の有るより居るはうらよ
原下村御系と見えてとくを
遠より一目に教と活れへ湯山
の害なり

湯山 かつと村へ一里
登樵村 上下あり六甲山多門寺平相

國清堂の祈禱所と云念寺並松庵
赤松庵は同則祐の墓あり道は右
様のまよと云小社あり

山伏峠 老は摩耶親善への道あり
美法谷 有馬より三里寺老庫道の
半途は是より老の老庫道は丹生
丸山田道と

上谷村 板屋と云前より九里と云

丹生山田道

三十一

の家基をたゞ家なりと云

山田村 十二村あり長と云たりは覽

わり山田の覽と云

鐵鬼の喉 下へ谷川出て山田岨道と見

分大石よりさかり老樹茂むり

系野村 家小墜栗花の根をたがぬ

わりありしれ記録に載る所へ人五回十七

代廢帝天白皇の御宇先祖高橋

白瀧の首と云官女と云まふ是別核

佩を名を成の二女中お姫の妹なりと

云波後よまき鼓と我家乃東院よ葬

しに墜栗花の附とありて不思後

靈泉涌出しうた奏やとさげ白瀧乃

墓は辨才天の社と改しとそ結のうし

ろよちのうた石塔わり龍よへ虫よん守

ちんてん守源一尺守の石だみのかう

山田村

三十一

山田村

三十一

城を禰少とくし梅敷に入して七日めよ
あり紀出とら糸七日前よ又水浦とく
丹生山 系種村乾のま山白瀬はあ
子と初りし取と云親も雲山王権現の
社わり道難ゆ若の因基と云道尾の
うける額わりじうへ百坊あり一ふ一今
の終よ二坊はとまり

下村 家小就孝尾也老の家わり義隆
よはへし惣尾三郎義久惣義元ニハ終春より今
宅老の義高まで十二代の孫のより家
傳の系圖わり義隆へ丹波は三系山
あて系家とあひ居して播磨清の山
乃西とくえ丹生山の山田へ出惣尾へ繋り
宅老白河とく細村と越後よりと
有りたの細村は南の老と秋揚が奉

（）
藤原の近加

と云惣尾より細の細村を惣と云
よも惣と云

庭あり義經の掛所あり辨を惣
井り義久よわくそ一太刀あり辨を惣

太刀の長三寸無井り太刀の三寸守あり

衛原 家小部本市場家と云農家

里信子年家と云大同元年よ建一

が幸にそ災難よわゆるゆめ今にあり

しとかり背の處は次の二層の窓の石

と基の石は遠りそ一は板櫃を

いけつりし石をそとて安兵衛のあを

まてして長くうへにひてわたりたるがこ

ろく旅人け家火難の熱あること類

へご中と銘ふがゆへにあつては元とあ

て楯楹の端とけつりたりて古心

あつとふすさかり

（）
藤原の近加

三十一

六条八幡宮 山田の内中村に殿後
比村より有り古に宮地のほは系奥に云
條判友為義不思後此塔現也
系の八幡と云ふよりつされしは東鑑
よ六條のあり宮に建尉の禊室を案
内建徳と熱して右清ありと勅後
た女牛の池地とありれとわり
三田

志保 宮の極乃海道へ歩くをより
末の事昔より凡湯山あり三本よ
歩方に淡河乃海道に七里丹生の山
田越に八里也
○姫路より大坂京に乃の中海道并
左右を近の右西古跡と記と姫路
れを多に東よの道と記と
るとも右より記取の記と

館 姫路より一里西あり班鳩と
 て太子雲ありお人の院は推古天皇
 聖徳太子は籠りたまひし地なるが
 取よび寺は建しとて日本記と考ら
 小推古天皇十四年秋七月天皇皇
 太子に侍て侍勢を謀しむ三日
 に院竟先菜皇太子亦法親王と
 中宮は講天皇右喜て攝摩麻呂

田百町白皇太子は籠りありとて
 田と云がけ地なるゆへは天和の班鳩と
 うつしたる如く
 室津 姫路より又里神の方名あり
 海道はわたりは澄之家よりゆへは
 の津と接し灘と云をりは海邊は若
 かり加茂の社の社傳系は慈女の
 若所一町あり草は細工名産あり

徳の室の津中若西之淡路の強徳
と別

細干 姫路より三里余米の方之富
鏡の地中河原多し川の船着あり
公館潰れ丸龜に東極後取據り
此の極後取れられてあり津江色取
之記極後取の方江わげと云東極
後取は新門寺あり盤珪禪師の園

基天寺之堂塔美藤を地深寂よ
して寺傍祥師の遺徳を傳ふる也
小朝富の森縁をいつとあ憐る事か
く祥師の地より室の海道あり
鏡磨津 姫路の南一里なり町瀬廣
し海色中奥塩黒材産しうらに
徳の船着あり集りてこれより川舟
中へ船着ありは高家富で繁昌

徳の室の津中

若西之淡路

の地より津多の細江と云若水と云
也今細江町と云

非路 宿 前小巻記と

是より本海道と記と

御志 宿

非路より一里は若水より加古川

へ三里あり

阿弥院

海道から若根への道より右

の方へ地を引くびり一霊夢よりありて

は多の海へ細江を引けるに阿弥院
の寺像と引あげし由は若根ありを
曾根 松原又天神の社ありしは
瀬濱より揖保漆は多のより若根
なり若水より松の社に引くあり菱家
鏡は多の九邊の村極路と云

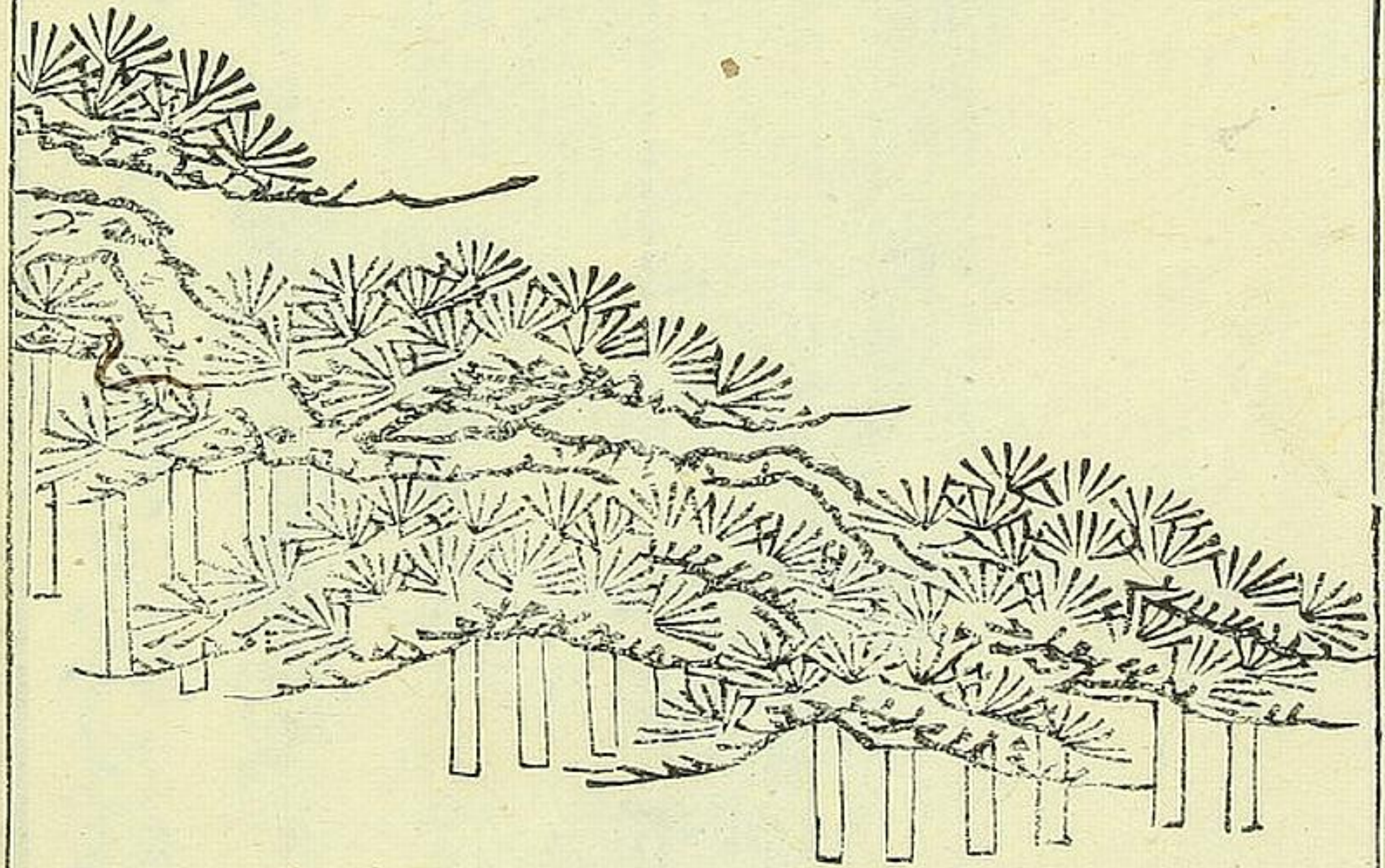
松の湯

ぬるとさ一丈八尺

さ 一丈

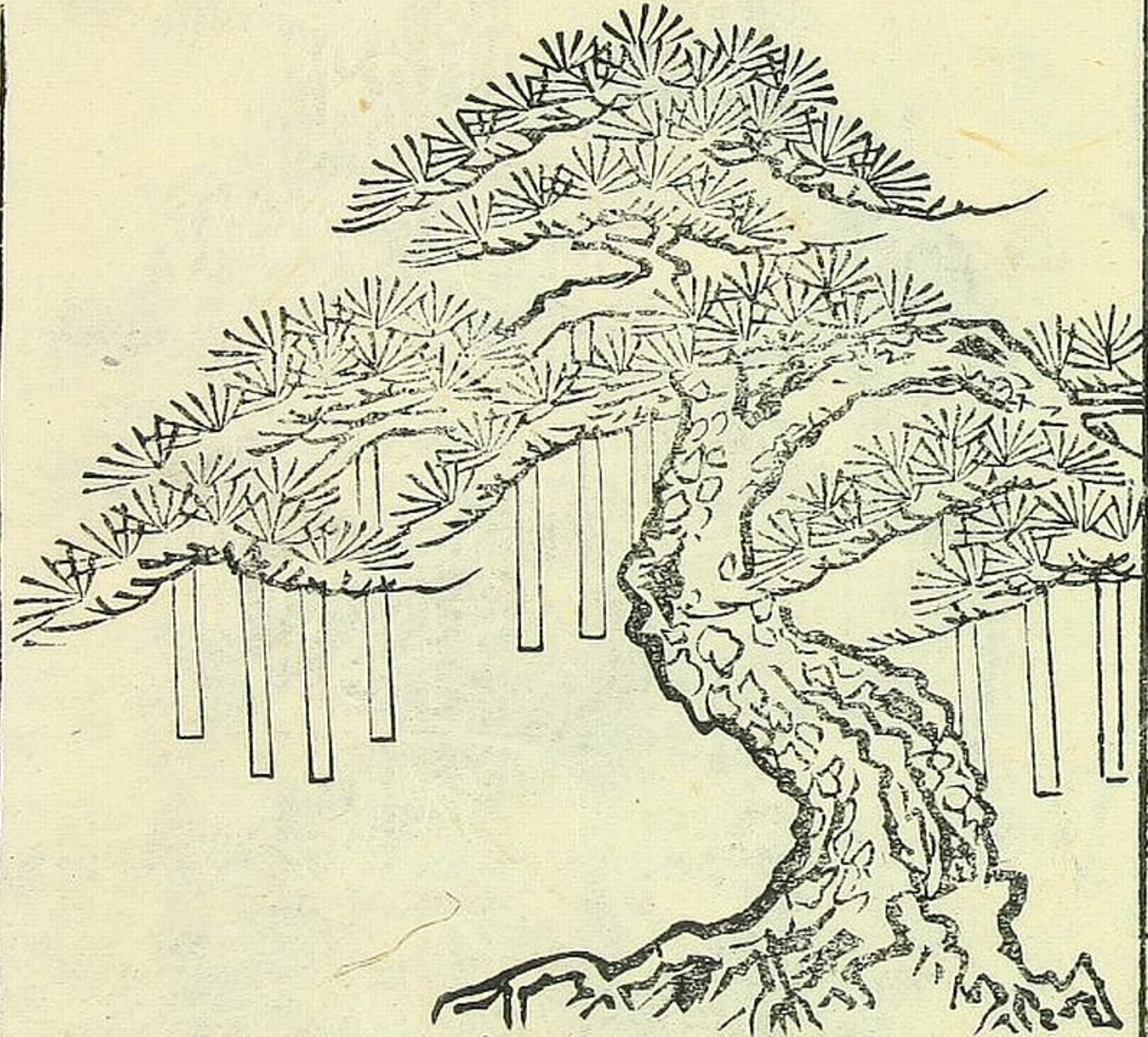
あはれさ 一丈

いねさ ぬるとさ 十尺あり



ぬるとさ 十間余

つら柱 百十餘

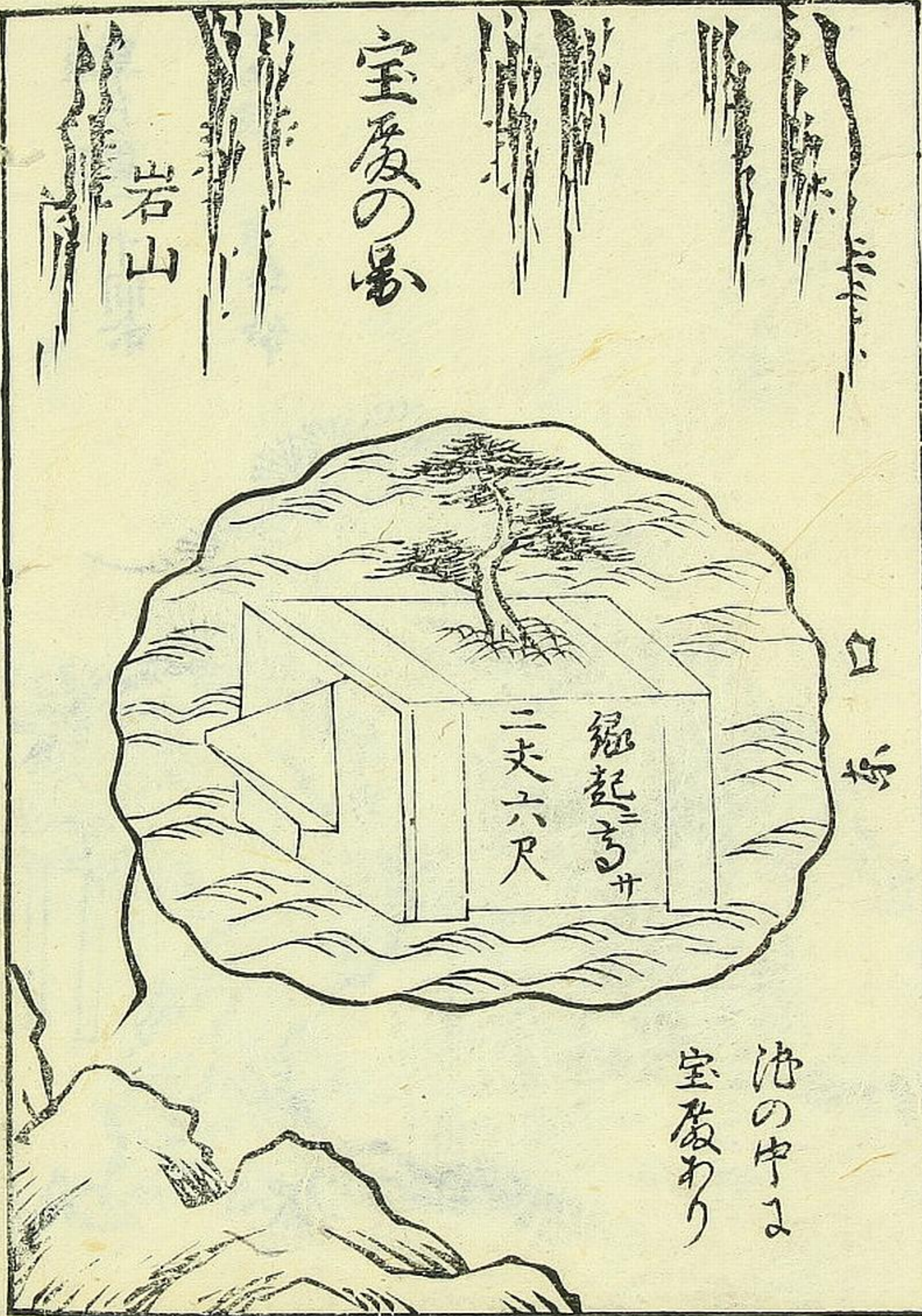


松の湯

松の湯

宝殿の景

岩山



口

池の中は
宝殿あり

石の宝殿 道より南なり義教の道の
 側より南根より西よりゆく時甚
 近し藤より右階とのけり社あり
 生石子より御徳の敷社と崇なり
 是れ宝殿と斬て後には社ありて
 其斬層へ一里をり小社を以て位と云
 ひよありて社壇乃じりり宝殿あり
 わづらひ石のつらねてを申に屋乃

宝殿の景

三十一

形よさらりたる石をり下へ石神のごとく水
 濁りまよふのせつるがごとく下が扉乃
 はなりと神友れ徳のぶらりし事なり
 いまぬはもと甚たさあまの人力さばんそ
 かごし一或流よ生石子も神念の陰陽
 の二神夫婦のごとくわらひまのいほと
 付よ天女降て社と造らんと擲りよ
 況黎明よ及ぶが故よ起るよ能わらば

してより去しこそ万葉集三巻石子
 村主真人の歌よ大汝小彦名乃將座
 志知乃石室者貴代將經也よめり
 宮の中へとも
 石乃 名取之海色あて富家多し宝
 屋より恵よ砂をよ一舟渡しよ
 危よ 石乃の並ひなり名取乃松
 原よ後者乃社わり雲乃松とてわ

れとて背の本にわらひ鐘の鐘樓よ
かりとて海士乃小船と云い書老年
中に日向大明神の案て魁有りあふ
と云物へて社の外細中にも尺をり
の石舟之櫓械いそねり下又社乃
表と云よあそそき砂の瓦上の櫓
よりの舟の案て名取よわらひ
砂と瓦とと山の熱名よよめる
あは

万葉よ書よとてうけり

刀田山 瓦とより八所わり海乃上遊

中よは聖徳太子徳伽藍之教達夫
皇十二年に百済の目録と教也
し刀田の中よ入て隠しる所ありゆ
へ刀田山と云とそ目録乃事目録
七巻よ書りて

か古川 宿 大久保へ三里事か古へ名取

宿と出てたの方よ和泉武平丸慕り
公人の説よ武部書写乃性定上人よ
途よりよ道き方耐宴よ一軒泊りあひ
一周年よ雨の若の集たりしと云傳ふ
さ道ほど和泉武平書写山集端のよ
たうあうに武平自他のもの終りに
色名よあたまよく岸相記と云書よ
載るといふと色能とひるにたうと捨

和歌集よ武部のうらたよりうらうと道
あそりりあへとさうらふとあつ山花端の
月と云あつ相とよ性定上人のり
よ後てつらうとさうとわらとあつと集端
ひし傳うに云傳へわらあわけさしよ部
か坂と云あり世人の説よ和の傳あひ
當心よりうらうとさうがゆへと集端乃
徳曲よ花車ありわら衣より後と

和泉武平丸

四十一

ふれら路清あれさうて皆はまの
縁とさ通りさうとも信くさく故人
附ましく云あへ

教信寺 ありく世口と云取道の元
わり念仏堂と云念仏堂あり教
信の常に跡跡と念して中朝養生の
ま一人かりち僧里民の部奇まは祝
と演てま願今に是朽腐じして

梅が傍尾ちよまるとりまご元身
秋書傍尾寺龍如の傳及姓生十固木
又教の取の部差あり

中園地 名取なり道より元後ま野
かりいあへの地中れまけいと云の道乃
元正町をうりにあり名取今への地より
地ゆひ也しく先を海りけ色清あ村迄
二見浦 名取なり道より二里許あり

海峽之里倍へうこみと云氣浦が佐る
の湯へはうらとてさまりしとあるは安ら
と名取方角抄を引近代の書は但
馬は二見浦なりと記せしむるも古
く名寄類字名取和方松葉集は
佐るはうらに及て歩破る浦うたづく
東の奇と南國の二見浦うらに有
る事よは英化へうらに接し二見浦あり

時多とまてしよめるあり昔は西國へ中
るに二見浦とありしと名取られたる浦と
實よとまりしゆらへ一難波より但馬へ
かりに迂をくまむらうは今も下るの
人いば浦より大坂へ船よ乗ゆへは浦は舟
人とも常に海道よ出て旅人よ渡り
とるこまよと京より海峽へうらの道よ
二見乃浦と云ふは海峽の事也るにわ

こと云へ彼古今集の詞書よりして
 名浦りたるゆへ一各西方向抄と傳
 へ宗祇の志死よわらうと云ふ
 友に浦 名西なり二尺より東の浦之民
 家地碌と傳りて業ととらふ
 大久保 名西へ一里あり
 解るが故 嘉吉年中に赤松滋祐が物
 猛勢と防し西なり背へ心けり

新藤生ありて遊難おせりよ
 今平陸より西なり北小坂
 新橋 加右川より一里ある道のたゞ
 わり橋よ云用心天白うらんろと名を
 久て挽架へより橋よが道と傳りて歸
 路わりし時樂談と云ふ跡とをらんろ
 り系新橋と云ふ大職冠の舞よあ
 らばりらにてそりうる籍よありや

いせごころんあ

明石 宿松平丸を築警後六万石の城と
城の南海北方の松の林を造り名所
なり松庫へ入里こ

大倉谷 松葉集よりあり明石より
里はうり所つこし申松より人丸塚
道丸よりあり所松の裏より忠度の腕
塚とてらひう記石丸

人丸松 海道より又云町松丸の心より
宮の松より又云町松丸の心より
壱水 或は壱見右雨あり日向大の松
の松あり

仲哀夫白皇沙墓 道丸よりありは帝
の陵への内は道丸の近辺は国と
云ふよりあり日向記より又白皇と河内を
長松の陵より壱とあり是なり松丸に

愛いわらん事いぶく道に強て云
んとあつて日本記神功皇后二年春三
月群卿百寮と領て穴門の巻浦の
まよ移天白皇此妻と收海路よ経て
系に向時麿坂王忍熊王天白皇崩
て皇后西と征白皇子新よ生と定て今
皇后あり子羣卿皆從必後て幼主と
立ば吾等何足とて弟よ皇天白皇の

乃よ陵と地ろと伴て接磨よ後て山
陵と赤石よ興仍弘と編て淡路の嶋
よ廻て皇徳の石と運て是と送人毎
に恙とて皇后と作とわまへあり

時の解波あり

梅ヶ端 道にたよ梶原源平系季が報
とさうしはよ指さるるをゆ枝系業
とそ小こ梅の木あり

塩屋里 揚津水踏の事ハ長厚名日記 松有是也
 東揚津水踏の事ハ長厚名日記 松有是也
 一若須磨名日記ハ委放思之

脩陽前府

河合章堯記

正徳六歳孟春吉辰

茨城多丸衛門版

貝原先生編述目次書林柳枝軒藏版

正	點例 二	筑前名寄 二	大和俗訓 八
徳	家道訓 六	樂訓 三	京都めくり 一
六	大和めくり 一	有馬名所記 一	鄙事記 八
丙	三禮口訣 五	木曾路之記 一	日光名所記 一
申	業譜 三	箱州之くじ 五	吉野山圖 一
歲	慎思録 六	續和漢名數 三	日本釋名 三
	文武訓 未刻	初學訓 同	神祇訓 同
	和學一步 同	扶桑紀勝 同	日用良方 同
	格物餘話 同		
	農業全書 十一	和爾雅 九	和漢事始 十三
	諺州 九	孝經釋義便蒙 未刻	



早稲田大学図書館

011688995533